

## 境界操作と建築

— 既存状態を利用して創出される空間の可能性 —

ベルリンの壁はかつて人々の活動の絶対的な境界だった (\*1)。しかし今は、西と東という区別はこちら側と向こう側という位置の差異でしかない。そのとき、かつての絶対的な存在はただの壁となり落書きのキャンパスという機能を獲得しつつも歴史を保存している。人々の活動が発生しなかった空間が今となっては様々な事を語り始める。そういった都市の中のどんづまり (\*2) が解放されたときその場所はかつてを想起させつつも新たな可能性を獲得する。その際に既存の状態を物理的に破壊しないことが重要である。もともとそこにある他との差異を保存しつつ新たなものに変容させること (\*3、\*4)。そのときにたち現われる空間体験は現在の東京における陰湿で可能性を失った都市の裏側という問題を解決することになりうると考える。



\*1 ベルリンの壁



\*2 都市のどんづまり



\*3 comme des garçons paris



\*4 Funf Höfe

## 西新宿再開発計画

### 既存の改修計画

一街区全体で既存を利用した再開発を提案する。都市の風物詩といわんばかりに氾濫する雑居ビルの集合体を、境界という概念を利用してリノベーションする。そういった集合体の中には、決して人目に触れないどんづまりの空間が存在する。

仮にそこを通り抜けたとすれば、その先にはにぎやかな街路空間が待っている。しかしながら、わざわざ通り抜けさせる形式は既存状態を利用する可能性を無視している。いつの間にか通り抜けてしまうこと。その過程の中で、既存状態にあるどんづまりの空間の魅力を体験できること。それが結果としてその場所を活用することにつながっていくこと。

東京都新宿区西新宿一丁目で具体的に計画する。新宿という都市には、様々なスケールの建物がある種の集合をなしている。そしてその集合同士が脈絡のない隣接をもって存在している。だからこそ大きなスケールや小さなスケールの都市が群をなしているという事実を私たちに認識させている。そういった事実を利用して計画を提案する。



計画対象街区

西新宿一丁目



新宿界限

JR Shinjuku station



西新宿高層ビル街



サザンテラス



思い出橋



新宿駅東口界隈



歌舞伎町



新宿ゴールデン街

before



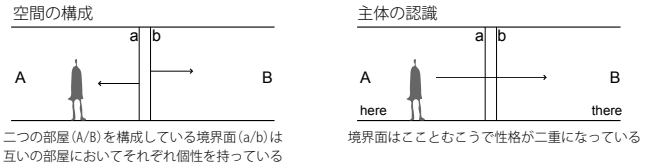
### 境界操作と建築

街区の中央部は個々の建物の奥にあたる。そこはその空間より先がなくどんづまりになっていることが大半である。その空間を境界操作によって活用できるものへ。

各部屋はそれを取り囲む境界とその部屋の外側と接している境界の二重構造になっている。既存でもそれは変わらないが次の空間を感じさせるものではない。そこで終わってしまう。

境界操作とはその二重構造の境界をそれぞれ独立させて考える操作である。こちら側と向こう側の空間を定義している境界はそれぞれに依存せず単独で存在しているものと捉える。そうすることで奥に存在している空間の特性を消極的なものではなく、他と同等に認識できるようなのではないだろうか。

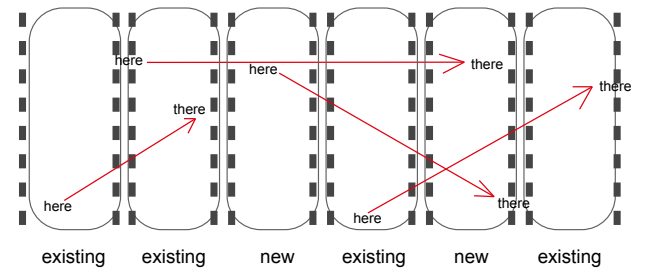
### 境界の固有性



### 既存状態を利用して創出される空間

それぞれが独立している空間として計画されること。他との差異を獲得していくこと。これを実現するために有効な手段として、新旧の対比があげられる。この敷地における問題点は、街区中央部に人々のアクティビティが発生できないことである。それによって既存の各部屋は完全に隔離されてしまい、前面道路とのみ関係を築くことができるという状態にある。つまりどの部屋で起こっていることも他の部屋に伝播することはなく結果として利用できない空間は前面道路から物理的に遠い位置に存在している。そこがどんづまりである。そして同時に誰も触れていないという空間は他とは圧倒的に異なり、その異質さは新宿という都市の特性として人々に認知されている。その魅力を保存することと既存を残しつつ新しいものを挿入し、それらの差異を形成することが既存状態を利用することである。その結果として生まれる空間構成は、奥にある空間とそのさらにむこうにある空間を関係付け(\*5)、開口部やパターンなどの体験的連続性を付加して、様々な用途を許容できる空間を創出する(\*6)。

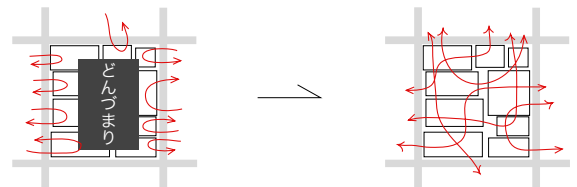
### 空間の体験的連続性



### 可能性 —どんづまりの解消—

空間の体験的連続性の獲得は人々の空間移動を奥へと誘発することにつながっていく。様々な空間のあり方や利用方法を視覚的に重層していくような構成は、動線計画において大変有効な手段であることは既存の様々な建築計画によって周知のことであろう。それをここにおける形式に順応させたことでどんづまりの解消という目的は達成されている。そして可能性という意味は、一つに空間の有効利用によって、用途の幅が広がるということがあげられる。しかし最も重要なことは、この空間操作が時を隔てて再度繰り返していけることである。新しく挿入された空間が既存であると認識される時、その既存状態を利用し、再び境界操作を行える可能性がここにある。

### どんづまりの解消



after

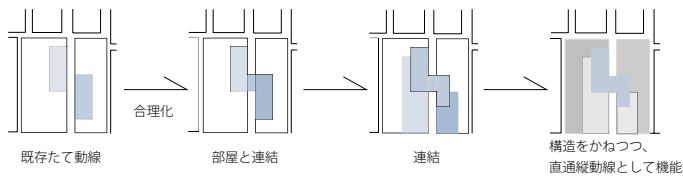


\*5



\*6

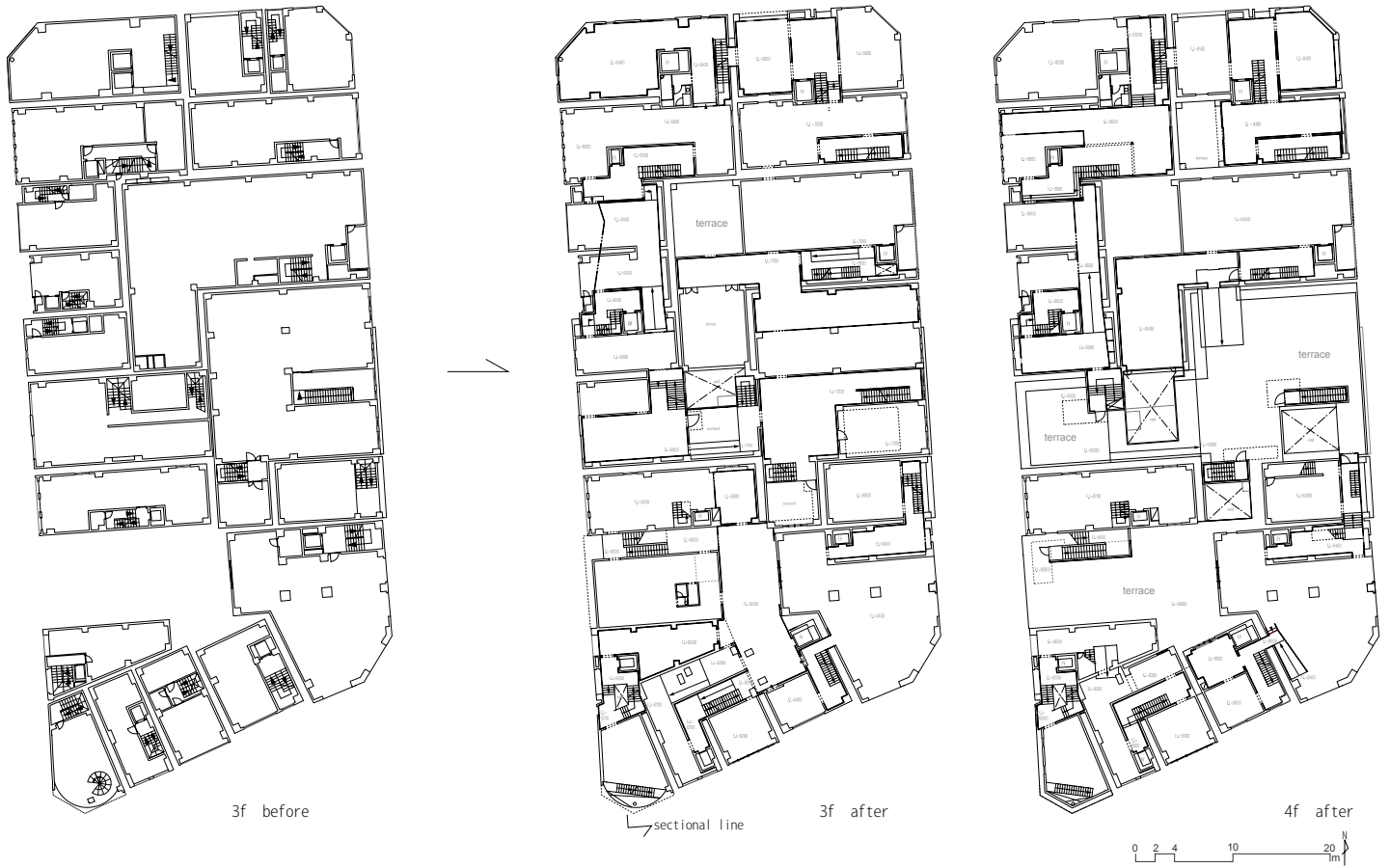




### 縦動線の更新

一街区全体で見ると既存の縦動線の数が多いことがわかる。しかしながら、各部屋への直通動線となっているために削除していくことは好ましくない。そこで隣り合う縦動線を一体化し、スケールの大きな、開けた階段室に更新し人々の動きを上層階へと導く。

平面図による比較

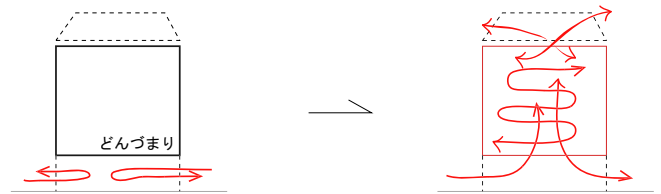


断面計画



### どんづまり空間の活用

誰もが都市空間の延長として上層階を利用できるような構成を実現する。既存では前面道路に直結している一階部分以外にそういった構成は望むことができない。縦動線の更新と外観に上層階を意識させるデザイン構成を用いることにより上層階のどんづまり空間は様々な用途を許容できる。さらに斜線規制によって切り取られた4層以上の階はテラスなどが活用される。屋根面は都市の中のヴォイドとなり広場として大いに活用できる。

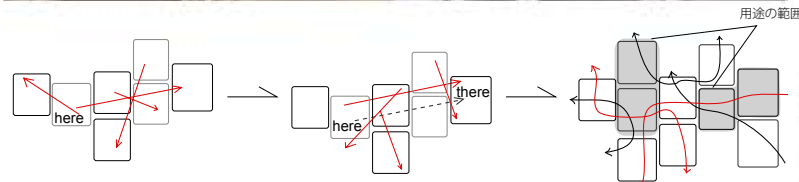


0 1 2 5 10 m

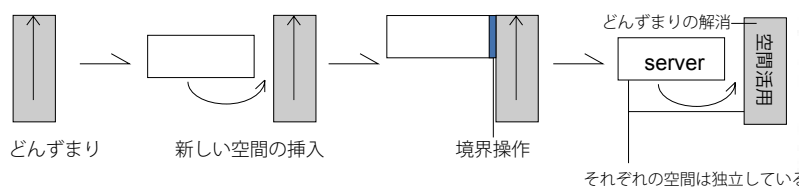
外観は一見変化していないが、既存の開口部を通して内側に新しく建築された壁が見える。



ヴォイドは部屋を整えるためではなく、裏の魅力を都市空間につなげるために計画する。



ひとまずの目的地 (there) が奥にどんどんと現われ、どんすまり状態は解消される



それぞれの空間は独立している

更新された縦動線は、最終的に既存の様々な高さで構成された空間性豊かなテラスを発見する。



屋根面



4階



固有の境界で形成された様々な部屋の連続

